

## 秀吉の家臣・伊藤与左衛門吉次は、和算の開祖・毛利重能ではないか？ 島野達雄

2025年5月のパートナー・小坂葉子の入院を機に、伊藤久徳・九州大学名誉教授（気象学）とメールのやりとりをするなかで、伊藤家に伝わった「先祖代々調書（以下、調書）」と「口伝」を知った。

伊藤家の祖・伊藤与左衛門の名は、『言継卿記』天正四年（1576）十一月二十日条の「早旦令乘輿、三条町伊藤与右〔左〕衛門宿、葉〔羽〕柴筑前守旅宿へ罷下、西園寺、菊亭、予（=山科言継）、万里小路、就口公事儀、万頼入之由也」にあらわれている。山科言継らの公家衆が京都三条で伊藤与右〔左〕衛門が営む宿屋に泊まっていた羽柴筑前守（秀吉）に「就口公事」について依頼をした、という記録である。

伊藤与左衛門は天正年間に、しばしば豊臣秀吉の宿所を提供したことでも知られている<sup>[1]</sup>。

また、天正十一年（1583）閏一月十二日付けの秀吉が直筆で書いた伊藤与左衛門宛の書状が現存しており、「算用」や「下算用」をおこなうよう秀吉が伊藤与左衛門に指示したことがわかっている。

伊藤与左衛門は、天正年間に計算や数学をもって秀吉につかえていた。

なお、天正十一年十月二十四日付けの伊藤秀盛・同吉次連署書出（かきだし）に、「伊藤与左衛門尉吉次（花押）」の署名がある<sup>[2]</sup>ので、伊藤与左衛門の諱（いみな）を吉次と決定できる。伊藤家に伝わった調書は、伊藤家の初代を秀吉につかえた次郎右衛門吉次としているが、同じ時期の秀吉の家臣に同姓同名の伊藤吉次がいたとは考えにくい。次郎右衛門は与左衛門の別名のひとつであろう。

本稿では、天正年間に秀吉に宿舎を提供し、数学・計算をもって秀吉に仕えた京都三条の伊藤与左衛門吉次を伊藤吉次（吉次と推定できない場合は、伊藤与左衛門）とよぶ。

ここでは、第一に、秀吉発給の書状や切符を史料として用い、伊藤吉次の数学および計算能力と毛利重能『割算書』の記述を比較対照して、伊藤吉次が「割算天下一」を自称するに足るほどの、当時としては高度な数学知識を持っていたことを示す。

第二に、伊藤家が伝承した「調書」「口伝」および『肥後国志』などに依拠して、伊藤吉次が関ヶ原合戦後に処刑された小西行長配下のキリストンであり、『角倉源流系図稿・吉田光由条』や『荒木先生茶談』の記述に対して、大坂落城後の毛利重能の消息と伊藤吉次の動向が大きくは矛盾しないことを示す。

すなわち本稿では、伊藤吉次（または、伊藤吉次の子）が和算の開祖・毛利勘兵衛重能と考えられる理由を、両者の持っていた数学知識と伝記的事項という二つの側面から明らかにしたい。

もとよりキリストン史の一次史料はほとんどなく、本稿も仮説の域を出るものではない。

以下、古典籍・古文書などの引用は、読みやすさを考慮し、おおむね現代の表記法を取り入れている。

### 1. 秀吉が伊藤吉次に「算用」「下算用」を命じた書状

上に述べた秀吉自筆の伊藤与左衛門（吉次）宛天正十一年（1583）閏一月十二日付け書状を示す。

態（わざと）申遣候、  
一、代官所知行方之算用、聞可申候間、手間不入（いらざる）様、下算用能々（よくよく）仕、書立候て、此方左右（指示）次第、可罷越（まかり越すべく）候事、  
一、物成（年貢）と藏ニあり米書立、先（まず）早々もたせ可越候、それを見候て、入（いる）事候間、不可有由断（油断）候、  
一、山口（=不詳）ニ申付候つる賀茂之物成、人ニ借（=貸借）候事無用候、何（いづれ）も念を入、能仕候て置可申事、  
一、右何も不可有油断候、尚追々（おいおい）可申間候、恐々謹言  
筑前守 秀吉（花押）

（天正十一年）閏正月十二日 伊藤与左衛門殿

秀吉は、この書状で、代官所・知行方の「算用」について吟味するので、手間をはぶくため、伊藤吉次にあらかじめ「下算用」をおこなって書き立て、持参するよう命令している。ここでの「算用」は物成（年貢）の数量の計算を意味しているのである。

秀吉は、伊藤吉次に、そのような計算をおこなう能力があることを認めていた。

なお、数学史では、「算用」は計算や数学を意味している。毛利重能『割算書』に先行すると見られる龍谷大学蔵『算用記』は、現存する日本最古の数学書と言われている。

イエズス会が宣教師の学習用に発刊した『日葡辞書』では、「サンヨウ算用 カンガエ、モチイル」「サ

ン算 カンガユル」「サンカン算勘 カンガエ, カンガユル」「サンス算数 カンガエ, カゾユル」とある<sup>[3]</sup>. 毛利重能の通名・勘兵衛は「考える人」の意味かもしれない.

## 2. 秀吉自筆の伊藤吉次宛・米穀渡方切符（その1）<sup>[4]</sup>と『割算書』の計算

天正十一年（1583）正月三日の「い藤よさいもん」宛「切符」は、銀40枚分の米を京都の相場で購入し、清水九郎二郎に確かに渡すよう命じている.

しろかね四十まいのふん、こめにてもさやう（きやう？）のうりかいのふんに、  
四ミつ九郎二郎たしかにわたし可申候

天正十一年正月三日 秀吉（花押）

い藤よさいもん

毛利重能『割算書』<sup>[5]</sup>の《銀子四十三割次第》は、重さが四十匁（もんめ）前後の丁銀に豆板銀を添えて四十三匁とし、「ひとつみ」とする当時の（京都での）慣例にもとづいている<sup>[6]</sup>. 銀の重さから枚数を求めるには、43で割る必要があった.

割る数（除数）が1桁のときの割り声（割算の九九）を八算（はっさん）、43のように割る数が2桁のときの割り声を「見一（けんいち）」といい、あわせて八算見一という. 加減乗除のうち割算（除法）の八算見一は、複雑な割り声を覚えなければならず、当時の人々にとって割算は一朝一夕にできるものではなかった.

この切符の「しろがね四十枚の分」つまり40枚の銀の重さは $43 \text{匁} \times 40 = 1720 \text{匁}$ になる.

また、『割算書』の《米の売買の次第》に、銀十匁に米三斗五升替（かえ）、つまり銀10匁と米35升の等価交換の時、銀三貫五百七十五匁（銀 $357.5 \times 10$ 匁）に相当する米の量を求めるには、 $35 \text{升} \times 357.5 = 125125 \text{升} = 125 \text{石} 1 \text{斗} 2 \text{升} 5 \text{合}$ と計算すると記されている.

この切符が指示している40枚の銀の重さ1720匁に等価な米の量を求めるには、 $\text{米 } 35 \text{升} \times \text{銀 } 1720 \text{匁} \div \text{銀 } 10 \text{匁} = \text{米 } 6020 \text{升} = \text{米 } 60 \text{石 } 2 \text{斗}$ <sup>[7]</sup>という計算をしなければならない. これだけの米を清水九郎二郎に渡せ、というのが秀吉が伊藤与左衛門に与えた命令であった.

秀吉は、伊藤吉次が銀十匁に米三斗五升替の時、銀10匁：米35升=銀1720匁：米6020升の正比例が成り立ち、上のような計算ができるのことを知っていたからこそ、このような直筆の書状を発給したと推定できる. ただし、比例定数の概念を伊藤吉次が知っていたとは思えない. 銀の重さや米の量は外延量だが、銀10匁あたり米35升つまり銀1匁あたり米3.5升という比例定数は、二つの外延量の関係を示す内包量であり、一段階上位の数学の概念である.

## 3. 秀吉自筆の伊藤吉次宛・米穀渡方切符（その2）<sup>[8]</sup>

拾貳（十二）石、かゝ方（=不詳）は京のますにて、わたしあるべく候. 以上

天正六年（1578）九月廿三日 秀吉（花押）

い藤よ左

この「京升」で米を量るよう指示した切符は、大正九年の東京古典会『稀覩書入札図録』にあらわれ、のち昭和十三年の『豊太閤真蹟集』<sup>[9]</sup>に掲載された. 『稀覩書入札図録』のグラビアには、「ポルトガル使節献上裂表具」と説明がある.

『日本書蹟大鑑』第12巻<sup>[10]</sup>の解説に、「あて所のくい藤よ左は、秀吉の家臣伊藤与左衛門吉次のこと. 彼は馬廻りとして、金銀の運営をつとめた人で、のちの（本能寺の変がおこった）天正十年（1582）には、播磨の所領のうち五石を封ぜられている」とある.

播磨の所領とは、信長の後継者と所領の分配を決めるために、柴田勝家・羽柴秀吉・丹羽長秀・池田恒興が集まった清州会談後、池田恒興について秀吉が播磨を領したことを指す.

「馬廻り（親衛隊）」はともかく、秀吉自筆の命令書を受取っていた伊藤吉次の扶持（ふち）が五石とは、いかにも少ない. この解説の典拠は明らかではない.

『割算書』の《物に升数入次第》に、「京升は口五寸四方、深さ二寸五分有. さしわたし両にをきかけ、深さかけ、六二五（=62.5立方寸）有. 是一寸四方の物（=一辺が1寸の立方体）、六十二半有也」とある. 寛永四年（1627）版大型四巻本『塵劫記』では、『割算書』の口（くち）五寸四方、深さ二寸五分の升を「むかし升」と呼んでいる.

「是一寸四方の物、六十二半有也」という文言から、毛利重能は、面積と体積の違い、つまり2次元と3次元の図形の違いを理解していたようである。平方根や立方根を求める、いわゆるニュートン近似（ホーナー法）は知らなかつたようだが、「開平と云は平（へい）に四方（よほう）になす算也」「開立法と云は四方高さも同寸に築（=賽サイ）のごとくになす算也」と『割算書』の巻末刊記で述べている。

吉田光由の『塵劫記』は、36桁の数の立方根を求めている<sup>[11]</sup>。『角倉源流系図稿』の吉田光由条に、光由は初め毛利重能のもとで学んだが、のちに重能は光由に学んだと記している。毛利重能は吉田光由から平方根・立方根の計算法を教えてもらったのかもしれない。

#### 4. 毛利重能は豊臣政権の中核にいた？

このほか、『割算書』には、《唐目（とうめ）を日本目に直（なおす）次第》、《借銀（しゃくぎん）利足（りそく）の次第》など日常生活に欠かせない「算法（計算法）」を掲載している。とともに、上の2.3.で述べたように、秀吉の命令を実行するため、と思われる算法を紹介している。《普請割の次第》は権力者つまり秀吉の命令通りに、大名が石高に応じて土木工事を担当する比例配分の問題や解くための説明書（マニュアル）の趣きすらある。著者の毛利重能は秀吉政権の中核に近い位置にいたと言えるであろう。

その一方で、毛利重能は、『割算に懸（か）けてはやき分』として、「二十五に割物は四の声を懸（か）けてよし」などのアイデアを載せている。軽々に判断できないが、このアイデアは毛利重能が独自に考え出したのではないだろうか。すくなくとも、それだけの数学的な力量（センス）を毛利重能は持っていたようと思える。

秀吉直筆の書状や切手に必要とされる計算法を考えると、伊藤吉次は、毛利重能が持っていた八算見一はもちろん、数学的知見のほとんどを理解していたと考えられる。

#### 5. 伊藤吉次は著名な数学者だった？

伊藤与左衛門の名は、本稿のはじめに述べた『言継卿記』天正四年（1576）<sup>[12]</sup>十一月二十日条を皮切りに、天正五年（1577）閏七月十七日付けの秀吉発給の「請取状（請取証文。天正5.閏7.17）」の宛先として登場する。このほか、秀吉が伊藤吉次宛に発給した米・豆・金銀の払渡切符は、3.で紹介した「米十二石の切符」ほか天正年間のものが数件残っている<sup>[13]</sup>。

豊臣秀吉は、伊藤吉次が割り算はもちろん、正比例・比例配分・面積・体積の計算を理解している「天下一」の実力の持ち主であり、家臣の誰よりも信頼できる人物だと認識していたのではないだろうか。それゆえ数学者・伊藤与左衛門吉次の名は、人々のよく知るところであったであろう。

以上、伊藤吉次が毛利重能に匹敵する計算能力の持ち主であったと推測できることを示した。

ここからは、伊藤吉次の経歴が毛利重能のものと大筋において矛盾しないことを示そう。

#### 6. 小西行長の家臣・伊藤与左衛門

中国攻めの最中の天正五年（1577）頃と推定される秀吉発給の伊藤与左衛門宛の文書では、伊藤吉次や脇坂安治が預けた金子、キリストンの小西立佐（=小西行長の父。隆佐とも。教名ジョーチン）より受け取った金子などの処置について秀吉が指示を与えている<sup>[14]</sup>。

九州平定をおえた天正十五年（1587）秀吉は突如、バテレン追放令を発した。秀吉は財政を担当していた小西行長を評価していたのであろう、このとき小西行長（立佐の次男。教名アゴスチノ、アウグスティヌス）は高山右近とは異なり、何の处罚も受けなかった。

翌年、秀吉は加藤清正と小西行長にそれぞれ肥後半国を領地として与えた。以来、加藤清正は北部の熊本城、小西行長は南部の宇土城の修築に励み、文禄・慶長の両役や関ヶ原の合戦で二人は終生のライバルとなるわけである。

小西行長が宇土城主となったとき、伊藤与左衛門は小西行長の家臣として登場する。

肥後半国的小西領では、宇土城主・小西行長のもと、領内諸所の支城にキリストンの部将が城代として配置された。佐敷城（隈莊城）には小西隼人（行景とも。立佐の三男。教名ジョアン）、矢部城には結城弥平治（教名ジョルジ）、八代城（古麗城）には小西行重（行長の家臣。教名ヤコブ）、そして赤井城（木山城）の城代が伊藤与左衛門であった<sup>[15]</sup>。ただし、この伊藤与左衛門の諱が「吉次」であったという確証はない。

ここからは、史実をベースに想像を加えて、<伊藤吉次が毛利重能と改名したと考えられる理由>を順に説明したい。関流の和算家のあいだで言い伝えられた毛利重能の伝記や『割算書』の記述に対し、伊藤家に伝わった伝承とが大きくは矛盾しないことを示そう。

## 7. 伊藤吉次はキリストンとして知られていた？

これまで述べたように、伊藤吉次はそうとうな有名人であったと考えられる。伊藤与左衛門はすなわち伊藤吉次を指すものと、当時の人々は考えていたといえる。むろん小西行長の家臣である伊藤吉次が、ほかの城代たちと同様、キリストンであることを、当時の人々は知っていたと推測できる。

HP 和算序林の「時慶記のキリストン」で述べているように、慶長十八年（1613）の全国禁教令の發布以降、市井の人々は、「吉田角倉家がキリストンにきわめて近い位置にいたことを、公言できない暗黙の了解事項としていたのではないか」と筆者は考えている<sup>[16]</sup>。伊藤吉次のばあいも同様に、西欧側の史料はなくとも、キリストンだったことは確実であろうし、そのことを市井の人々は知っていたであろう。

## 8. 伊藤吉次は加藤清正に救われた？

慶長五年（1600）関ヶ原の合戦で徳川家康率いる東軍が勝利をおさめ、西軍の小西行長は生け捕りにされて、鉄の首枷（くびかせ）をつけられ、石田三成、安国寺惠瓊とともに京都六条河原で処刑された。

この年、東軍に属する加藤清正は宇土城と各支城を攻略した。

『宇土市史』は、宇土城中には五人の宣教師が籠城したと伝えている。

この『宇土市史』は、森本一瑞が書き残した元文元年（1736）刊行の『肥後国誌』<sup>[17]</sup>に依拠している。

赤井城（木山城）には小西家臣・伊藤与左衛門城代として之に居る。清正宇土を攻んと木山に立越、本陣を居へらる。赤井城には固守すべき兵なき故、扱ひ（=調停）となり、与左衛門切腹して開城す。

其子・伊藤四郎左衛門（四郎兵衛とも<sup>[18]</sup>），後に加藤家に奉仕して禄百石を賜ふ。

と森本一瑞は伝える<sup>[19]</sup>。八代城の小西行重と矢部城の結城弥平次は、城を棄て、薩摩の島津家を頼って逃亡したという。

父の切腹と引き換えに、息子（二代目伊藤吉次？）が生きのびて、加藤清正につかえる扶持百石の侍となつたわけである<sup>[20]</sup>。

けれども、「固守すべき兵なき」状況で、伊藤吉次が一人で切腹したのだろうか。実際は小西行重や結城弥平次と同じように逃亡したのではないだろうか。加藤清正が伊藤吉次の数学の才能を惜しんで意図的に見逃した可能性もないとは言えない。

## 9. 二代目伊藤吉次も数学学者だった？

伊藤家の「先祖代々調書」は、初代次郎右衛門吉次（1. で述べたように伊藤吉次）は、嫡子権七郎、次男五郎助、三男権之丞の三人の子がいた、と伝えている。このうちの誰が伊藤四郎左衛門（または四郎兵衛）と名乗り、加藤清正に仕えるようになったのかはわからない。

肥後一国の領主となった加藤清正は熊本城の築城工事のほか、河川の治水工事、田畠の灌漑工事、海岸の防潮工事をおこなっている。二代目伊藤吉次（？）は、こうした工事に求められる夫役（人夫役）の、各郷村への割り当てなど、工事に必要な計算に、父親の初代伊藤吉次から受け継いだ力を発揮したことであろう。

加藤清正は、慶長十六年（1611）夏にこの世を去る。おそらくその後、二代目伊藤吉次（？）は役目をとかれ、浪人となつたであろう。清正死後、伊藤家の者が加藤家の庇護を受ける理由は見当たらないからである。以後、（後述する尼崎藩の侍帳を除いて）伊藤与左衛門の名は、歴史の表舞台には登場しない。

なお、伊藤家の調書では、一家はその後、縁故を頼つて伊勢国（三重県）に移り住み百姓となっている。

## 10. 大坂夏の陣に参戦した伊藤吉次

関流二伝の和算家・松永良弼が初伝の荒木村英から聞いた話をまとめた『荒木先生茶談』は、「古來の算師は毛利勘兵衛重能と云へり。大坂城中の人也しが一統の後、江府に浪人なりしつかや」で始まる。すなわち毛利重能は大坂の陣に参戦し、その後は江戸で浪人になったようだ、と述べている。

伊藤家に伝わった調書と口伝から、伊藤吉次に関係する部分を抜きだして紹介しよう。

当家の古を尋ねれば太閤豊臣秀吉公の家臣知行高五百石および①御寄合組頭役にて、初代吉次（②元亀元年生）は天正十七年（1589）小田原出陣<sup>[21]</sup>にお供し、③朝鮮の両役（文禄の役・碧蹄館<sup>[22]</sup>の戦い、慶長の役・蔚山籠城の戦い）、関ヶ原合戦等、数度の出陣相勤め、④その後秀頼公の御代、大坂夏の陣にて大坂落城により吉次は嫡子・次男・三男および妻と五人にて淀川の葭（よし）群生地にて七日七夜の間、葭の根を摘みて命をつないだ。（伊藤久徳氏が自身の父親から繰り返し何度も聞いた話のこと）

この伝承で興味を引くのは、伊藤家初代の次郎右衛門吉次（この人が伊藤吉次と考えられることは1.で述べている）を①元亀元年（1570）生まれとし、②知行五百石の秀吉の家臣で、御寄合組頭を勤め、③朝鮮の両役に出陣し、④慶長二十年（=元和元年。1615）の大坂夏の陣に参戦、大坂落城後は七日七夜のあいだ家族で淀川の水中にひそんだことである。

最後の④の「七日七夜の沈黙」は『旧約聖書』のヨブ記にある逸話に似ている。戦前に『割算書』が発見されたとき、序文の「割算のアダムとイブ起源説」から、毛利重能キリスト教説が生まれたが、ヨブ記の「七日七夜の沈黙」をもって、伊藤吉次キリスト教説が生まれても不思議ではない。

ともあれ、ほかの豊臣家の家臣と同様に、伊藤吉次が小田原攻めをはじめ、③文禄・慶長の役など秀吉の軍事行動に参戦し、秀頼を奉じて④大坂夏の陣まで戦ったことは、『荒木先生茶談』の「古来の算師・毛利勘兵衛重能」は「大坂城中の人なり」に対応している。

③の朝鮮の両役出陣は、毛利重能が秀吉の家臣で二度明に渡った、という伝説<sup>[23]</sup>に対応している。

## 11. 御寄合組頭の意味するもの

調書①は、伊藤吉次が「御寄合組頭」であったとしている。寄合（よりあい）は江戸幕府では無役の旗本を指し、数学者・建部賢弘が寄合に属した。建部は関流和算の集大成とも言うべき『大成算経』を著わし、吉宗に命ぜられて日本地図（享保図）を作成している。秀吉の時代でも、寄合は、特定の役職を持たない、個性的で優秀な数学者などの人材を意味したのではなかろうか。

## 12. 毛利重能に学んだ三子と「吉」の偏諱

また、『荒木先生茶談』は、毛利重能には今村知商・吉田光由・高原吉種（のちに一元）という三人の弟子がいたと述べている。確かに今村知商はその著『堅亥録』の序文で、「予、僕幼にして算術にこころざし、諸書を閲し、術をおこなうといえども、ことごとくは解するあたわざるなり。ここに一日、花洛毛利氏重能、明算の学士なるをつたえきき、たずねゆきて、予の茅塞（ぼうそく）をはく」と毛利重能に学んだと述べている。

吉田光由も『角倉源流系図稿』は、「光由弱年より算学にこころざす。初め毛利勘兵衛尉重能にしたがって学ぶ」と記している。伊藤吉次が元亀元年（1570）生まれであれば、天正十九年（1591）生まれ<sup>[24]</sup>の今村知商より21歳年上になる。同じように慶長三年（1598）生まれの吉田光由より伊藤吉次は28歳年上になる。伊藤吉次が二人の師であったとしても、大きな矛盾はない。

高原吉種が毛利重能にどこで学んだかは明らかでないが、『荒木先生茶談』は、「高原氏の門人に磯村喜兵衛吉徳、算法闕疑抄、同頭書を作る」と、高原の弟子に磯村吉徳がいる、と述べている。伊藤吉次の「吉」の字を高原吉種も、その弟子の磯村吉徳も受け継いだ（偏諱、片名ともいう）のではないだろうか。

筆者は伊藤吉次が数学ができることと「吉」の字の継承という二点だけでも、伊藤吉次が毛利重能と考えられる強い根拠になると見える。

## 13. 摂津国武庫郡瓦林は尼崎藩の領地

毛利重能は元和八年（1622）刊行の『割算書』の巻末刊記で、「右作直悉改事は、摂津国武庫郡瓦林之住人、今京都に住む、割算之天下一と号者也」と、京都に来る前は摂津国武庫郡瓦林に住んでいたことを明らかにしている。この住所は、元和五年（1619）の『帰除濫觴』にも示されていたようである<sup>[25]</sup>。つまり元和五年まで毛利重能はこの住所にいたようだ。

『兵庫県史』<sup>[26]</sup>の史料編・中世1・摂津武庫地区・岡本文書の解説に、「岡本家は、江戸時代武庫郡瓦林村（西宮市）に居住し、尼崎藩の大庄屋を勤めていた。同家には多量の近世文書が所蔵されている」と

ある。瓦林村の岡本家は尼崎藩に属していた。つまり豊臣政権下で有名な「瓦林・鳴尾の水論（武庫川・猪名川の取水争い）」<sup>[27]</sup>の舞台となった瓦林村は尼崎藩の領地であった。

『兵庫県史』資料編・近世1にある「尼崎藩の家臣の構成と知行」<sup>[28]</sup>を調べると、寛永十二年（1635）の「青山氏給帳集」に「弓組二百五十石 伊藤与左衛門」の記載がある。

寛永十二年は『割算書』の元和八年の13年後（元和五年の16年後）にあたる。伊藤吉次が元亀元年生れとすると、66歳である。

この尼崎藩の家臣・伊藤与左衛門が我等の（？）伊藤吉次であるとは、にわかには信じがたい。けれども、肥後熊本藩を離れ、浪々の身となつた初代の伊藤吉次または二代目伊藤吉次と、毛利重能が住居を置いた尼崎藩の瓦林村をつなぐ細い糸があることは否定できない。

いったん毛利重能と改名し、尼崎藩を脱藩して京都二条に移り住んだ伊藤吉次の子孫が、寛永年間に家名を再興し、「伊藤与左衛門」を復活させた可能性もゼロではないだろう。

瓦林村の岡本文書は、今後の数学史の重要な研究対象になると思う。

#### 14. 池田輝政の封国の郡吏・毛利重能

『角倉源流系図稿』には、「毛利重能はもと池田三左衛門（＝池田輝政）尉殿封国の郡吏なり。故ありて国を去り、洛陽二条京極の辺に寓居して、天下一割算指南の額を出（い）だす」と、毛利重能が池田輝政の領地で勤務していた侍であった、と記されている。

上に述べた瓦林村を池田輝政が治めていた、という史料があれば話が早いが、じつは、池田輝政は、播磨姫路52万石のほかに、摂津・淡路も領有したという説などがあり、領地は不確定である。池田輝政が摂津国を領有したのであれば、瓦林村は摂津国であるので、毛利重能は池田輝政配下の侍であった、と『角倉源流系図稿』が裏付けられる。

だが、『兵庫県史』所収の「池田輝政家来地方（じかた）知行目録（慶長十四年）」<sup>[29]</sup>と「（池田氏）播磨宰相御代侍帳（慶長十八年）」<sup>[30]</sup>を「伊藤与左衛門」「伊藤四郎兵衛」「毛利重能」などをキーワードとして検索してもヒットしない。

池田輝政の封国の研究も今後の課題のひとつである。

伊藤与左衛門という名前は、日本語として座りの良い（？）せいか、江戸時代、日本各地に登場している。国会図書館デジタル・コレクションで調べると、美濃国苗木藩で伊藤与左衛門の墓を発見した、という本<sup>[31]</sup>が表示される。宇和島藩の郡奉行に伊藤与左衛門という人がいるし、『宿毛市史』『奈良市史』『姫路城史』<sup>[32]</sup>でも伊藤与左衛門がヒットする。

昭和二年の『日本紳士録』第31版には「三条通油小路西入橋東詰」の伊藤与左衛門が掲載されている。この人は、ほかの紳士録に「菓子舗」として載っている。今でも何代目かの伊藤与左衛門氏が三条油小路西入橋東詰で和菓子店を営んでいるかもしれない。

数学史はおおむね数学と歴史が好きな人が研究している。歴史学はおおむね歴史が好きで数学が嫌いな人が研究している。歴史学をこころざす人には、ぜひ若いうちに数学が好きになっていてほしい。若い人が数学を好きになるかどうかは、もちろん本人の努力ではなく教師次第である。

#### 【注】

[1] 『言継卿記』天正四年（1576）十一月二十日条のほか、『兼見卿記』天正十年（1582）十二月三日条に「羽柴筑州上洛、三条伊藤宿所也」、同天正十一年（1583）六月三日条に「筑州三条之伊藤所へ行、午刻山崎へ下向」、同天正十一年七月二十一日条に「昨夜筑州上洛、三条伊藤所に一宿」とあることから、京都三条の伊藤吉次の屋敷が秀吉の宿舎となっていたことがわかる。

[2] 『伊阿弥家文書集（郷土研究史料第12輯）』練馬郷土史研究会 1960, 8-9 p. 橋本政次『姫路城史』1973 や橋川正『鞍馬寺史』1926 などにも伊藤与左衛門吉次の名が見える。

[3] 今泉忠義『日葡辞書の研究・用語上』1970.

[4] 『河出人物読本 豊臣秀吉』大阪城天守閣所蔵豊臣秀吉関係資料解説、1983.

[5] 西田知己校注『割算書』江戸初期和算選書第2巻・研成社 1991

[6] 同上書。

[7] 1石=10斗=100升=1000合=10000勺=100000才。

[8] 東京国立博物館蔵。橋本政次『新訂姫路城史』上巻・昭和27年・499p.

[9] 『豊太閤真蹟集』東京帝国大学史料編纂所・昭和13年。

- [10] 小松茂美編・1979. 解説は 191-192p.
- [11] 平山諦『和算の誕生』恒星社厚生閣 1993・3p 所引の岩波文庫の『塵劫記』208p.
- [12] 調書のように伊藤吉次が元亀元年生れとすると、天正四年は 7 歳になる。『言継卿記』に登場する伊藤与左 [右] 衛門は、初代伊藤吉次の父親かもしれない。
- [13] 谷徹也・博士論文「近世成立期の統治構造」2016 の第二章豊臣政権の算用体制【表 1】に示されている、戸田清兵衛と今井宗久（？）に各 50 石の豆を払渡す切符（天正 9.5.6），米 16.77 石を払い渡す切符（払渡先不明。天正 9.6.5），狩野宗秀女子に米 100 石を貸与する切符（天正 10.1.21），幸阿弥長清に米 250 石を払渡す切符（天正 10.1.21）が秀吉発給の伊藤与左衛門宛の切符。
- [14] 『湖北・長浜のあゆみ：館蔵品図録』市立長浜城歴史博物館 1994 所載の「羽柴秀吉書状 伊藤吉次宛 一幅 天正 5 年（1577）頃」。この図録は「伊藤吉次は『竹生島奉加帳』にもその名がみえ、秀吉の家臣であったことが確認できる」と指摘している。
- [15] 『宇土市史』1960. 50 p.
- [16] HP 和算序林の＜時慶記のキリシタン（番外編 2）＞の「太宰春台の「朱子学者は天主教徒になる」説」2024 年 4 月第 316 回近畿和算ゼミナール。
- [17] 『肥後国誌』は元文元年刊と明治十三年版がある。
- [18] 『古記集覽』巻 35 「加藤家侍帳」に「津田兵部与力・百石伊藤四郎兵衛」とある。
- [19] 森本一瑞遺纂『肥後国誌 2 増補校訂』1971. 水島貫之校補・後藤是山編。
- [20] 『肥後国誌 2 増補校訂』1971 の 66 p に、清正が慶長六年十一月十七日に伊藤四郎兵衛に発給した「（百石の）宛行所領之事」（伊藤家文書）が載っている。
- [21] 秀吉が伊達政宗に小田原参陣を命じたのは、天正十八年正月。秀吉軍は三月に京都を出陣し、四月に小田原城を包囲した。六月に伊達政宗が到着。七月に北条氏直が降伏し、秀吉は小田原城に入った。
- [22] 調書の原文は、「白石帝館」と誤る。
- [23] HP 和算序林の「和算の開祖・毛利重能」2025 年 2 月第 325 回近畿和算ゼミナール。
- [24] 今村知商の生年は野口泰助ほか著『今村仁兵衛知商と内藤政樹』による。
- [25] 『明治前日本数学史』第 1 卷 35p.
- [26] 『兵庫県史』史料編・中世 1・1983.
- [27] 谷徹也・博士論文 2016.
- [28] 『兵庫県史』史料編・近世 1・1989・366p. なぜか尼崎市の「尼崎家臣団データベース「分限」」に伊藤与左衛門は入っていない。
- [29] 『兵庫県史』史料編・近世 1・1989・380p.
- [30] 同上書 353p.
- [31] 千早保之『苗木藩 墓からみた歴史』。
- [32] 橋本政次『新訂 姫路城史』昭和 27 年の巻末索引は「伊藤与左衛門吉次」として 399p と 499p の 2 件を示している。499p は本稿 3. の天正 6 年 9 月 23 日の切符。399p は秀吉が但馬を平定するべく、「（天正八年？に、但馬平定のため）秀吉が伊藤与三右衛門」をして兵三千を率いて水生城を攻めさせたところ、逆に「与三右衛門」は討ちとられ、秀吉軍は敗走した、というもの。「吉次」である根拠は示していない。